



## 1970年の30年後 そして 2000年の30年後

大綱 浩一

### 1. はじめに：現在とは、未来の過去である。

私たちを取り巻く変化は急激であり、誰もが日々その変化への対応を迫られています。あまりの目まぐるしさに、ともすれば対処療法に陥りがちです。しかし、たとえ対処療法であっても、変化の本質を理解し、目標さえ見通せていれば一貫した対応は可能はずです。現在 29 歳の私は、順当に行けば約 30 年後に定年を迎えます。その意味では 2030 年が私にとっての目標といえます。

しかし、変化の本質を理解し、未来を見通すことは容易ではありません。そこで本稿では、(1)社会構造の変容、(2)メディアの変容、(3)図書館の変容、そして(4)図書館の変容の方向性について考えた上で、最後にいくつかの技術動向から 2030 年の可能性について考えたいと思います。

### 2. 社会構造の変容：1970 年代の情報社会論

本章では、1970 年代の情報社会論から現在進展しつつある社会構造の変容について考えるが、その目的は 3 つある。まず 1 つは、1970 年代の情報社会論を知ることである。1970 年代の情報社会論は社会思想であり、現代社会の成立及び変容に大きな影響を及ぼしている。もう 1 つは、今まさに進展しつつある社会構造の変容を知ることである。社会構造の変容は、社会システムの一要素である図書館の変容にとって、最大の外的要因の 1 つである。そして最後の 1 つは、未来を見通すとはどういうことかを知ることである。なお本稿では 1970 年代の情報社会論として 1973 ダニエル・ベル「脱工業社会の到来」、1980 アルビン・トフラー「第三の波」、そして 1968 ピーター・ドラッカー「断絶の時代」を取り上げる。

(次頁へ)

### [目 次]

1970年の30年後 そして 2000年の30年後	大綱 浩一	...	1
連載『本の紹介』第4回	村上 美代治	...	5
支部報へ投稿なさいませんか		...	8
2002年度会費納入のお願い		...	8

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL：http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm

1973 ダニエル・ベル「脱工業社会の到来」<sup>(注1)</sup>

ベルは「脱工業社会の到来」において、時代を「前工業社会」、「工業社会」、「脱工業社会」に区分し、その対比から「脱工業社会」の特徴とその移行過程を次の5次元から提示する。(1) 財貨生産経済からサービス経済への移行、(2) 専門職・技術職階層の優位化、(3) 経験的知識から理論的知識への移行、(4) 技術管理と技術評価、そして(5) 新しい知的技術の興隆。ベルは、科学技術革命で生まれた技術革新や政策決定に関わる知識成長が社会発展のあらたな基本要因であるとしている<sup>(注2)</sup>。

1980 アルビン・トフラー「第三の波」<sup>(注3)</sup>

トフラーは「第三の波」において、時代を「第一の波」、「第二の波」、「第三の波」に区分する。「第一の波」は農業段階であり、完成するのに数千年(紀元前 8000~1650-1750)かかった。「第二の波」は工業段階であり、わずか 300 年(1650-1750~1955-1965)で完成した。「第三の波」はまさに今起こりつつあり、数十年(1955-1965~)とかからずに完成するかもしれないとしている。また、段階の移行期には「古い段階を生き長らえさせようとする変化」と「新しい段階を迎え入れようとする変化」が同時進行的に現れるので、目標を設定するためには、両者をはっきりと見分けることができなくてはならないと警告する。

1968 ピーター・ドラッカー「断絶の時代：来るべき知識社会の構想」<sup>(注4)</sup>

ドラッカーは「断絶の時代」において、(1) 情報化の進展、(2) グローバル経済の出現、(3) 政府の無力化、そして(4) 知識社会と知識労働者の興隆から、社会と文明において根源的な変化、すなわち断絶が起こりつつあると指摘する。

## 1970 年代の情報社会論の特徴

三者の主張には異なる点も見られるが、次の2点において共通している。(1) 「情報社会(情報が価値とみなされ、情報によって機能する社会<sup>(注5)</sup>)」または「知識社会(知識、とりわけ理論的知識が、社会のあらゆる領域で、発展を駆動する基本的な要素となる社会<sup>(注5)</sup>)」の出現、(2) 「不連続性」または「断絶」の発生。

## 3. メディアの変容：インキュナブラの盛衰

本章では、インキュナブラの盛衰を例にメディアの変容について考える。なおインキュナブラとは、活版印刷術が発明された 1450 年から 1500 年までの 50 年間にヨーロッパで刊行された、写本に似せて作られた刊本(印刷本)の総称であり、写本の字体を模倣した活字が使われ、紙のほか獣皮紙も使用され、さらに写本のような色彩をほどこすこともあった<sup>(注6)</sup>。

1455 年グーテンベルグにより活版印刷術が発明され印刷本が刊行されるようになったとされるが、その初期には、わざわざ印刷術(新しい技術)を用いてインキュナブラ(古い様式の本)が作成されていた。この事実から、いまだ写本を重視した当時の嗜好が示され、技術に対する読者層の保守性を見ることができる<sup>(注7)</sup>。しかし、それではなぜインキュナブラは 50 年で衰退してしまったのだろうか。

1964 マーシャル・マクルーハン「メディア論：人間の拡張の諸相」<sup>(注8)</sup>

マクルーハン「メディア論」において、「メディアはメッセージである」と定義する。われわれは通常、メディアが運ぶ内容の方をメッセージとして受け止めている。しかしマクルーハンは、それが運ぶ内容に関わりなく、メディア自体が人間の感覚に反作用して、新しい経験と社会関係の形式をつくりだすと指摘する<sup>(注2)</sup>。この指摘を援用すれば、印刷本というメディアが人間の感覚に反作用して、新しい経験と社会関係をつくりだした結果、古い様式のインキュナブラは衰退し、印刷本独自の様式に移行していったと考えられる。

#### 4. 図書館の変容：電子図書館論

本章では、電子図書館論から電子メディアの出現に伴う図書館の変容について考える。なお本稿では、電子図書館論として1982 ランカスター「紙からエレクトロニクスへ」、2001 海野・戸田「「図書館」の社会的機能縮小の必然性」を取り上げる。

1982 ランカスター「紙からエレクトロニクスへ：図書館・本の行方」<sup>(注9)</sup>

ランカスターは「紙からエレクトロニクスへ」において、(1)ペーパーレス社会の出現とその影響、(2)インターフェースとしての図書館、(3)所蔵とアクセス可能性、(4)施設としての図書館の消滅、そして(5)図書館員の未来について言及している。ランカスターは1970年代の情報社会論を引用し、情報の追求と処理ということが社会のあらゆる部門を通し、その重要性を増してゆくと指摘すると共に、コンピュータと電気通信に関する技術の進展と実用化によって、ペーパーレス社会が出現すると予測している。また、図書館を「特定の人々の集団と利用可能な情報資源の世界の間のインターフェース(両者を結ぶもの)」と定義する。所蔵しているか/していないかはアクセスのしやすさの違いでしかなく、アクセスがしやすければ、所蔵しているか/していないかはほとんど問題にならない。オンラインによってアクセス可能性が向上すれば、アクセスに所蔵を必要とするため一体化していた、図書館の「施設」と「機能」が分離するとしている。また、エレクトロニクス時代には情報専門職の重要性が高まるとした上で、図書館員は施設としての図書館から離れることによって情報専門職として価値を高めるべきであると主張する。

2001 海野・戸田「「図書館」の社会的機能縮小の必然性：情報流通の構造変化と図書館の存立意義」<sup>(注10)</sup>

海野・戸田は「「図書館」の社会的機能縮小の必然性」において、(1)印刷メディアをよりどころとした「図書館」の特徴、(2)ネットワーク系メディアの出現に伴う図書館の変容について次のように述べる。印刷メディアには、アクセスのために現物へ物理的に接近し、占有して利用しなければならないという特性があり、「図書館」はその特性をよりどころとして、(1)コレクションの形成(集中・保存・選択)、(2)網羅的収集と永久的保存、(3)図書館自体の地理的増殖と棲み分けという戦略を展開してきた。しかし、「図書館」が採用してきたこれらの戦略はパッケージ系メディアを前提としており、ネットワーク系メディアに適用することができない。ネットワーク系メディアは地理的な所在や空間的な距離を意識せず、いつでもどこからでもアクセスできる仕掛けを提供するので、コレクションの形成は無意味であり、地理的な増殖と棲み分けも情報アクセスの効率化を向上させない。ネットワーク系メディアでは情報の生成、更新、削除が極めて頻繁に行われ、存在も流動的で同一性も安定していないので、網羅的収集と永久保存という戦略も採用できない。ネットワーク系メディアの威力で「図書館」の社会的機能は縮小し、その存立意義は揺らいていると指摘する。そして、新たな戦略として「コンテンツを差別化すること」、「ゲートウェイ化を目指してネットワーク情報資源を選別すること」、「空間の提供」、そして特に「質の高い人的サービスの提供」を挙げている。

#### 電子図書館論の特徴

両者の見解は、(1)電子メディアの出現によるこれまでの図書館の消滅又は縮小、(2)人的サービスの重要性を指摘する点において共通している。

#### 5. 図書館の変容の方向性：Memex

本章では、電子図書館の起源とされる1945 ヴァンネバー・ブッシュ「人の思考のように：

Memex」<sup>(注11)</sup>から、図書館の変容の方向性について考える。なお、Memexとは、機械化された個人用ファイルと個人用図書館であり、個人がすべての蔵書、記録、手紙を蓄積し、かなり速く柔軟にこれを調べることができるように機械化された装置のことである。

#### 科学技術

ブッシュは「現時点で関心をもたれているものの範囲が広がり、多様化して、出版物が過剰になったことが問題なのではなく、実際に記録を使いこなすわれわれの能力をはるかに超えて出版物が増大していることが問題であろう。人間の体験の総和は驚異的な割合で拡大しつつあるのに、その時々的重要な事柄に至る、結果的に迷路のようになっている道筋をたどるために使っているのは、帆船時代と変わりのない手段なのである。」とした上で、既存制度の改革ではなく、科学技術にその活路を求めたのである。

#### 記憶装置

また電子メディアの特性から、電子図書館論では(1)情報の蓄積と流通が乖離しはじめている、また(2)情報を如何に効率よく流通させるかが重視されているように思われる。しかし、ブッシュのMemexは必ずしも情報の流通のみを重視したわけではない。それは個人の記憶装置として描かれている。

### 6. おわりに：2030年、1つの可能性

それでは最後に、2000 歌田明弘「本の未来はどうか：新しい記憶技術の時代へ」<sup>(注12)</sup>から、2030年の1つの可能性について考える。

一口にメディアの変容といっても、巻物から冊子体へといった形態の変化や、羊皮紙から紙へといった材質の変化など、様々な軸が存在する。歌田は「本の未来はどうか」において、本の本質は「記憶装置」ということであり、本の未来はデジタルの世界で可能になった筋道をたどるという行為を、どこまで現実空間に拡張できるかにあると指摘する。そして、ハイパーテキストが個別のテキストを相互に関連付けるように、(1)ユビキタスや、(2)オグメンテッド・リアリティ、そして(3)ウェアラブル・コンピュータといった技術が、ものとドキュメント、身体動作とドキュメントを結びつけ、本を超える新しい記憶システムを生み出そうとしているのではないだろうかと指摘する。(1)ユビキタスとは、人間が生活する環境にコンピュータを埋め込んでおき、人間の活動を支援しようと言うもので、人間がいちいち指示しなくても、コンピュータのほうで人間の意図を察知し、ネットワークで結ばれたコンピュータが連携して仕事をしてくれる仕組みのことである。また、(2)オグメンテッド・リアリティとは、現実世界にデジタル世界を重ね合わせて現実世界を拡張しようとする仕組みのことである。そして、(3)ウェアラブル・コンピュータとは、身につける視覚記憶装置であり、視覚補助装置及び外部記憶装置として働くものである。

今まさに図書館で起こりつつある変化は、「人間の記憶装置」または「知の揺籃」の変容に他ならない。そして、変化に良悪はなく、その対応が良悪を生じさせるのである。また、変化は必ずしも津波のように訪れるとは限らない。しかし、寄せては引き、引いては寄せ、着実に進展しつつあるのではないだろうか。1970年代の情報社会論にしろ、電子図書館論にしろ、予言を的中させつつあるのではなく、必然的な未来像を活字化し社会思想として普及させることで、社会システムの変容に方向性を与えているのではないだろうか。そして、ただ変化の過程に時間を要しているだけに過ぎないのではないだろうか。

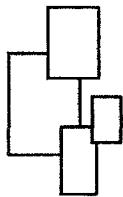
#### 参考文献

1. 脱工業社会の到来：社会予測の一つの試み / ダニエル・ベル著；内田忠夫[ほか]訳；上，下。-- ダイアモンド社，1975

2. 社会学文献事典 / 見田宗介 [ほか] 編. -- 弘文堂, 1998
3. 第三の波 / A.トフラー著 ; 徳岡孝夫監訳. -- 中央公論社, 1982. -- (中公文庫)
4. 断絶の時代 : 来たるべき知識社会の構想 / P. F. ドラッカー著 ; 林雄二郎訳. -- ダイヤモンド社, 1969
5. 社会学事典 / 見田宗介, 栗原彬, 田中義久編集. -- 縮刷版. -- 弘文堂, 1994
6. 図書館情報学用語辞典 / 日本図書館学会用語辞典編集委員会編. -- 丸善, 1997
7. 図書館情報学ハンドブック / 図書館情報学ハンドブック編集委員会編. -- 第2版. -- 丸善, 1999
8. メディア論 : 人間の拡張の諸相 / マーシャル・マクルーハン [著] ; 栗原裕, 河本仲聖訳. -- みすず書房, 1987
9. 紙からエレクトロニクスへ : 図書館・本の行方 / F.W.ランカスター著 ; 田屋裕之訳. -- 日外アソシエーツ, 1987
10. 電子図書館 : デジタル情報の流通と図書館の未来 / 日本図書館情報学会研究委員会編. -- 勉誠出版, 2001. -- (シリーズ・図書館情報学のフロンティア ; No.1)
11. 情報研究への道 / 上田修一編 ; 武者小路信和 [ほか] 訳. -- 勁草書房, 1989. -- (情報学基本論文集 ; 1)
12. 本の未来はどうか : 新しい記憶技術の時代へ / 歌田明弘著. -- 中央公論新社, 2000. -- (中公新書 ; 1562)

おおつな こういち (国立情報学研究所)

#### 連載『本の紹介』第4回



### 『図書館学関係文献目録集成』

村上 美代治

図書館に勤め始めた頃、図書館内に自主的な研究団体である「図書館学研究会」が活動していました。先輩たちは常に『図書館学文献目録』（日本私立大学協会）をこまめに利用して文献をチェックしていたのを憶えています。その後研究会は解散してしまいましたが、私にとっては文献探索の手法や書誌の大切さを先輩から学んだと思っています。

さて、私が紹介するのは、金沢文圃閣より刊行された『図書館学文献目録集成』（2000～2002年）です。図書館学及びその周辺領域に関する文献目録は、『図書館情報学研究文献要覧（1970－1990）』（日外アソシエーツ1983－1993年）、『図書館情報学文献目録1991－2000』（CD-ROM版 2003年）によって、1970年以降の文献をほぼ網羅することができるようになりました。しかしながら、それ以前については、纏まった資料が存在していませんでした。その意味では、『図書館学文献目録集成』の刊行によって明治から1970年迄の文献目録が整備されたこととなります。刊行されて少し時間が経っていますが、まだ利用したことのない人や刊行そのものを知らない人に対して紹介をしたいと思います。館界の指導的地位にある人たちにより書評が出されていますので<sup>(1)</sup>、私は図書館現場の視点から本の紹介（主に戦後編）ができればと思っています。

稲村徹元・深井人詩という日本の代表的な書誌学者によって編纂されたこの文献目録は、これまで散在していた文献目録を復刻・編集・集成したもので、明治・大正・昭和前期編と戦後編とに大きく分かれています<sup>(2)</sup>。

刊行の特徴は、これまでに発表されてきた目録が一冊の本に集成されるとともに、執筆者索引が付されていて（戦前編は各巻、戦後編は第4巻）、著者名や団体からも検索が可能となったことです。『明治・大正・昭和前期編』第1巻の収録文献総数13,500件、執筆者索引2,050件、第2巻の収録文献総数5,700件、執筆者索引1,800件、『戦後編』（全4巻）の収録文献索引105,000件、執筆者索引10,710件となっています。

刊行された資料を個別に見ますと、『明治・大正・昭和前期編』と『戦後編』第1巻では、天野敬太郎書誌学の思想を垣間見ることができます。その特徴とされている書誌学に対する情熱、創意工夫（表記法の改善：略記、配列）、書誌・索引・目録へのこだわりを見ることができます。とかく軽視がちになりがちな書誌・索引についてその重要性を改めて示唆しているようです。

『戦後編』（1-3巻）に掲載された「資料室・図書館関係雑誌記事索引」は、全国の図書館関係出版物、活動報告書、要覧、館報と国立国会図書館『雑誌記事索引』より「図書館関係雑誌記事索引」部分を収録しています。最初の「図書館関係雑誌記事索引 1952年1月分」は『図書館雑誌』（46巻2号 1952年）に掲載され、末尾には「国立国会図書館の資料により作成」と記されています。46巻9号（1952年）より「資料室」という名のもとに、資料室に受け入れた資料と図書館関係雑誌記事索引が掲載されるようになりました。また、「今月の資料室から」コーナーが1959年～1964年の期間見ることができます。図書館界の活動を資料面から支援するため、日本図書館協会に届いた主要な資料の紹介がおこなわれています。菅原峻氏は53巻8号（1959年8月号）にこのコーナーを設置した趣旨について記しておられます。

一方、一連の文献目録を1冊の本に纏めたことによる限界もあります。元々1冊の本にまとめることを意図して編集されてこなかった故に、「資料室・図書館関係雑誌記事索引」等の各種の文献目録は、掲載文献に若干のタイムラグを生じています。また、『図書館学文献目録』（日本私立大学協会）は当初の目的を大学図書館関係者のために編集した故に、採録領域は大学図書館や専門図書館を中心にしており、学校図書館や公共図書館は含まれていないという面を持ち合わせています。

このような特徴を持ち合わせた文献目録は目立たない地味な装幀であるものの、NACSIS-Webcatにて所蔵館を確認してみますと、117館となっています。この数は多いか少ないか判断の分かれるところですが、今日の情報化進展のなかにおいて、過去の遺物と見なされることのない非常に重要な資料であると認められた結果の117館だと思います。私も図書館に異動直後、選書会議にて購入の提案をおこないました。

ところで、各図書館ともすべての業務がコンピュータ化され、ほぼ1日中画面と睨めっこの状態で仕事をしており、以前に比較して図書や雑誌資料に接する機会は激減している状態にあると思います。ややもすると、データの取扱操作だけに終始している面があり、図書館現場では本の知識なしで勤まることが可能である(?)との意見が出てこないかと危惧しています。もちろん、この資料はコンピュータの威力により著者名索引が出来上がったことは認めています。

今回紹介しました『図書館学関係文献目録集成』は、図書館界の先輩たちによる活動の集積結果の賜であり、私達は時代が変わっても図書館員の業務に対する真摯な態度を文献から学びとることは必要であり、その意味において改めて資料を手にとってみる価値があるかと思っています。『図書館学関係文献目録集成』の刊行は今後の図書館員のあり方・役割、ひいては図書館の本質について考察する機会を与えてくれたものと確信しています。この文献が死蔵されることのないよう、図書館現場で活発に利用されることを念じています。

(1) これまでに発表されている書評は、次のとおりです。

- 石井 敦：「『図書館学関係文献目録集成－戦後編』（全4巻）刊行によせて」（『図書新聞』2581号 2002年5月18日）
- 岩猿敏生：「新刊紹介－『図書館学関係文献目録集成－明治・大正・昭和前期編』（『図書館界』53巻1号 2001年）
- 岡村敬二：「天野書誌学を継承－明治初年から昭和14年までの図書館学とその周辺の文献目録」（『図書新聞』2521号 2001年2月10日）
- 堀込静香：「『図書館学関係文献目録集成』第1巻を読んで」（『図書館雑誌』95巻5号 2001年）
- 稲村徹元：「ようやく宝庫の鍵を得た思い－『図書館学関係文献目録集成－明治・大正・昭和前期編』の発刊」（『文献継承』3号 2001年）
- 稲村徹元：「これからやってほしいこと－『図書館学関係文献目録集成－戦後編（1945～1969）』の課題－」（『文献継承』4号 2002年）
- 田川浩之：「『図書館学関係文献目録集成－戦後編（1945～1969）』全4巻総索引について」（『文献継承』4号 2002年）

(2) 刊行形態・収録内容は次のとおりです。

『明治・大正・昭和前期編』全2巻 天野敬太郎編纂、深井人詩解説

\* 第1巻：天野敬太郎編「図書館学文献目録 昭和7年末現在と昭和8年～14年分」（『図書館研究』1934年～1940年掲載と1941年3月～1942年12月連載分）

\* 第2巻：

- ◎加藤宗厚・間宮不二雄共編『図書館学及書誌学関係文献合同目録』（青年図書館員連盟 1938年）
- ◎「昭和9～15年中の書誌学に関する図書及論文」（『出版年鑑』昭和10～16年版 東京堂 1935～1941年各年発行）
- ◎「書誌学関係文献目録 昭和16年」（『書誌年鑑』昭和17年版 協同出版社 1942年）
- ◎「書誌学関係文献目録 昭和17年」（『日本出版年鑑』昭和18年版 協同出版社 1943年）
- ◎「最近の書誌図書関係文献」（『読書と文献』日本古書通信社 1943～44年連載）

『戦後編（1945～1969年）』全4巻 稲村徹元監修 深井人詩解説

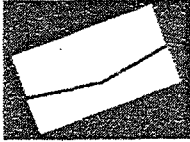
\* 第1巻：

- ◎「昭和23年1月から最近まで一般雑誌中の図書館関係論文目録」（『図書館学徒』第5～6号 1949年10～11月）
- ◎稲村徹元「図書館書誌学関係文献目録 1949年分」未発表原稿
- ◎天野敬太郎「図書館学文献目録1950～1952年」（『図書館界』1951年2月～1953年8月掲載）
- ◎「資料室・図書館関係雑誌記事索引」（『図書館雑誌』1952～1956年連載）

\* 第2～3巻：「資料室・図書館関係雑誌記事索引」（『図書館雑誌』1957～1970年連載）を編集復刻

\* 第4巻：『図書館学文献目録』（日本私立大学協会 1971年刊 新樹社発売）

むらかみ みよじ（龍谷大学瀬田図書館）



### 支部報へ投稿なさいませんか

京都支部では会員の皆様からの投稿をお待ちしております。  
自由なテーマで書いていただく「数珠つなぎ」や「本の紹介」、その他大学図書館に関することなどで日頃お考えのことやイベント参加の感想、見学の報告など、どのようなことでも結構ですので是非、ご投稿ください。

記名投稿のみ採用とさせていただきます。原稿受領後、採用の際にはあらためてご連絡申し上げます。

詳しくは大学図書館問題研究会京都支部ホームページ「支部会報」→「投稿なさいませんか?」をご覧ください。

URL : <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>



### 2002 年度、2003 年度 会費納入のお願い

盛夏の候、会員の皆様におかれましてはご健勝のことと存じます。2002 年度大図研会費及び支部会費の納入状況をお知らせいたします。すでに 2002 年度（大図研会計年度 2002.07～2003.06）が終了していますが、納入率は六割程度と依然として思わしくない状況にあります。

会費納入率の低下は大図研の活動に影響を与えるだけでなく、支部セミナーなどにも悪影響を及ぼします。納入いただいていない会員の皆様におかれましては、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願いいたします。

また、既に新会計年度に入りましたので 2003 年度の会費につきましても納入お願いいたします。

#### 記

大学図書館問題研究会会費	¥5,000
京都支部会費	¥2,000
合計	¥7,000

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員にことづけていただきますようお願いいたします。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は京都支部財政担当・吉田（京都工芸繊維大学）までお願いいたします。

[myos@kdm.jrnet.ne.jp](mailto:myos@kdm.jrnet.ne.jp)

（お詫び）

廣庭基介さんの「京大図書館史こぼれ話 三」は次号 No. 217 (2003. 8. 15) に掲載致します。